

民事訴訟政策と心理学

Policy and Psychology in Civil Procedure

著者:菅原 郁夫
名古屋大学大学院法学研究科教授

ISBN978-4-903425-56-6 C3032
定価[本体6,000円+税] A5判 並製箱入り 260ページ



筆者は、約10年前に、「民事裁判心理学序説」と題する論文集を出版し、法心理学研究の先進国であるアメリカにおける研究成果を参考に、わが国の訴訟制度に対するいくつかの提言をなしている。そこでは、それらの知見を通じ、心理学を基本的視点に用いた「手続工学」と呼ぶべき政策学的視点の提言をなした。……その時点では日本においては、心理学的な視点からの訴訟制度研究はほとんど存在せず、その時点での研究はいわば理論的視点の整理にとどまっている。当然のことながら、アメリカにおいて生じる現象が常に日本において生じる保障はなく、彼の地における知見は、改めて日本においても検証されるべきであった。

そのような課題に答えるべく本書は刊行された。本書は、前書に示された理論枠組みを日本においても検証すべく行ってきた実証研究の集積である。(本書「はしがき」)

[主要目次]

第1章 手続的公正の理論

- I はじめに
- II 紛争解決, 公正判断, 手続
- III 手続的公正判断とその効果
- IV 主観的手続的公正研究の発展
- V 手続的公正判断の根拠
- VI 手続的公正研究の応用

第2章 法手続と裁判における公正

- I 法手続と公正研究のかかわり
- II 客観的手続的公正と裁判手続の比較
- III 当事者主義型手続と糾問主義型手続の比較
- IV 陪審制度に対する評価
- V 裁判外紛争解決制度と公正研究
- VI 法の遵守と公正感覚
- VII 法手続と裁判における公正研究の今後

第3章 訴訟当事者にとっての手続的公正の意義

- I はじめに——訴訟に対する当事者の評価を測定することの意義
- II 調査の目的
- III 調査方法
- IV 調査結果
- V 調査結果からの考察
- VI 訴訟実務への示唆
- VII 今後の課題

第4章 和解の実態

- I 調査の目的と仮説
 - II 調査の方法
 - III 分析結果
 - IV 調査結果からの示唆
- おわりに

第5章 民事訴訟利用者調査の概要

菅原郁夫(すがわら いくお)

名古屋大学大学院法学研究科教授

専攻 法社会学・法と心理学・民事訴訟法

著作 民事裁判心理学序説(単著)(信山社、1998年)、法律相談の面接技法(共編著)(商事法務、2004年)、法と心理学のフロンティアⅠ・Ⅱ(共編著)(北大路書房、2005年)、利用者からみた民事訴訟(共編著)(日本評論社、2006年)、実践法律相談(共編著)(東京大学出版会、2007年)、目撃証人への反対尋問(共訳)(北大路書房、2007年)、民事模擬裁判ティーチング・マニュアル【改訂版】(共著)(慈学社、2008年)、現代アメリカ法廷技法(共訳)(慈学社、2009年)

第7章 地裁の規模と当事者評価

- I これまでの知見
- II 本章の分析の視点
- III 分析の結果
- IV 分析結果からの示唆

第8章 法廷における当事者の心理

- I はじめに
- II 人は訴訟に何を求めるのか
- III 法廷で当事者が見つめるもの
- IV 訴訟をして当事者は何を思うか?
- V 紛争解決と訴訟:文化的側面

第9章 訴訟経験と訴訟評価

- I はじめに
- II 人々にとっての訴訟とは
- III 訴訟経験後の訴訟観
- IV 訴訟観と訴訟経験

第10章 利用者調査の意義と訴訟政策

- I はじめに——本章の目的
- II なぜ利用者調査を行うのか——理論的背景
- III 日本における調査結果の概要
- IV 訴訟実務・訴訟制度設計への示唆と今後の課題
- V さいごに

- I はじめに
- II 利用者は訴訟に何を求めているのか？
- III 訴訟は利用者にとって身近な存在か？
- IV 訴訟利用者は訴訟経験をどう受けとめているか？
- V 人々は訴訟制度に満足しているか？
- VI まとめ

第6章 当事者の訴訟関与と訴訟評価

- I これまでの知見
- II 本章の分析の視点
- III 分析の結果
- IV 分析結果からの示唆

第11章 「民事訴訟利用者調査」と実務・理論へのフィードバック

- I はじめに
- II 訴訟実務へのフィードバック
- III 理論へのフィードバック——手続的公正理論と紛争解決の多目的理論の結合
- IV 今後の課題

巻末 初出一覧・索引